

日本グループ・ダイナミックス学会会報

ぐるだい

JGDA  
ニュース

The Japanese Group Dynamics Association

<http://www.groupdynamics.gr.jp/index.php>

第34号  
(2008年8月25日)

発行所：〒464-8601 名古屋市千種区不老町  
名古屋大学大学院教育発達科学研究科 吉田俊和研究室  
日本グループ・ダイナミックス学会  
e-mail: [sec-general@groupdynamics.gr.jp](mailto:sec-general@groupdynamics.gr.jp)  
発行人：吉田 俊和, 編集担当：西田 公昭

## 《 目 次 》

- § 第55回大会（於 広島大学）のご報告 …… 1
  - ★第55回大会を開催して：浦 光博
- § 本年度優秀論文賞決定 …… 2
  - ★優秀論文賞選考経過と結果の報告：浦 光博
  - ★受賞者の声：森尾 博昭／遠藤 由美
- § 第3回『優秀学会発表賞』決定 …… 4
  - ★選考経過と結果の報告：村本 由紀子
  - ★受賞者の声：三船 恒裕／木村 昌紀／前村 奈央佳／林 幸史
- § 常任理事会からのお知らせとお願い …… 7
  - ★役員選挙について
  - ★アジア社会心理学会発表支援制度について
- § 事務局からのお知らせとお願い／広報担当からのお知らせ／諸連絡先 …… 8

---

## ★★ 第55回大会（於 広島大学）のご報告 ★★

---

### 第55回大会を開催して

大会準備委員長 浦 光博（広島大学）

日本グループ・ダイナミックス学会第55回大会は、6月14日と15日の両日、広島大学東広島キャンパス総合科学部に開催されました。2日目の終了間際のひと雨以外は天候にも恵まれ、217名のものの方々にご参加いただき盛会裡に終えることができました。

今回の大会では、できるだけ企画をシンプルなものにすることで並行セッションの数を減らし、研究発表の際のディスカッションを実質的なものにするよう工夫したつもりでしたが、いかがでしたでしょうか。今大会をきっかけに、ご参加のみなさまの研究がより大きな広がりを持つものになれば幸いです。

ところで、大会スタッフの対応にはご満足いただけたでしょうか。少しでも気持ちよくお過ごしいただけるよう努めました。こればかりはご参加のみなさまの評価を待つしかありません。ご不満な点などございましたら、私宛ご一報いただきたく存じます。

来年度は、大阪大学にて日本社会心理学会第50回大会との合同学会が予定されております。会員のみなさまの研究が今後ますます発展し、年次大会も回を重ねるごとに充実したものとなることを祈念して、ご参加のみなさまへの御礼に代えさせていただきます。

## ★★ 本年度優秀論文賞決定 ★★

### ☆☆ 優秀論文賞選考の経過と結果の報告 ☆☆

審査委員長 浦 光博（広島大学）

今回の優秀論文賞の選考は、実験社会心理学研究第46巻1号2号への掲載論文14編と47巻1号2号への掲載論文13編をそれぞれ対象として行われた。選考委員全員がこれら2巻に掲載された論文の中から、それぞれの巻における優秀論文賞にふさわしいと考える論文3編以内を選び、1位～3位の順位をつけて事前投票を行った。この投票の結果は、1位とされた場合には3点、2位とされた場合には2点、3位とされた場合には1点として得点化し、集計された。選考委員会では、この事前投票の結果を基に審議し、各巻につき以下の論文を授賞論文と決定した。

森尾 博昭・山口 勲(著)「自尊心の効果に関する調整変数としての自己概念の力動性—ナルシズムとの関連から—」第46巻第2号掲載論文

#### 受賞理由

本研究は、自尊心のパラドックスについて、自尊心の力動性の調整効果に焦点を当て、巧みな方法によってその詳細を明らかにした秀作である。本来望ましい性質であるとされる自尊心が、時として望ましい行動や情動、認知と結びつかなくなることがある。従来、このような現象が生じるメカニズムについて自尊心の変動性に焦点を当てた検討が行われてきた。それらの多くは、外部からの刺激・情報を受け取ることによる自尊心の変動を扱ったものであった。これに対して、本研究では自己概念についてのダイナミカル・システム・モデルの観点から個人の内在的な不安定性に

焦点を当て、マウス・パラダイムを用いた検討を試みている。得られた知見は、自己概念の力動性、すなわち自尊心の内在的な不安定性が高い者は、自尊心が高まるほどナルシズム傾向が高まる傾向にあるのに対して、力動性の低い者にはそのような傾向が認められないことを示していた。これらの知見は、自尊心の変動性についての研究領域に新たな視点と方法論を切り開くものであり、日本グループ・ダイナミックス学会優秀論文賞を受賞するにふさわしい論文であると評価された。

遠藤 由美(著)「共有状況下での相対比較判断におけるバイアスと自己中心性の役割」第47巻第2号掲載論文

#### 受賞理由

本研究は、他者との共有状況における自他の相対比較判断にみられるバイアスに対する自己中心性の役割について、オーソドックスな方法を巧みに組み合わせることでオリジナリティの高い知見もたらしことに成功した秀作である。本研究においては、従来、同様の研究では区別することなく扱われることの多かった直説法と間接法を同時に用いた実験を行っている。それによって、自他の相対比較判断における自己中心性が、自己関連情報の自己への効果を過大評価することによって生じるものではなく、比較判断形成段階において自己関連情報を重点的に利用することによって生じるものであることを明らかにした。この知見は、当該領域におけるこれまでの研究が明らかにし得なかったものであり、それを堅実な方法と巧みな分析によって鮮やかに描き出した本研究は、日本グループ・ダイナミックス学会優秀論文賞を受賞するにふさわしい論文であると評価された。

\*\*\*\*\*

## ★★ 受賞者の声 ★★

## ◇ 森尾 博昭（札幌大学）

この度は実験社会心理学研究に掲載されました論文「自尊心の効果に対する調節変数としての自己概念の力動性：ナルシズムとの関連から」に対して「優秀論文賞」を賜り、まことにありがとうございました。この論文では、従来、高い・低いという視点からのみ議論されがちであった自尊心について、力動性という概念を新たに考えることにより、似た概念でありながら役割も帰結も大きく異なるナルシズムとの違いを明らかにしようとしてしました。力動性というのは「内在する変動」という意味で用いた、dynamismの訳語です。本論文は、自尊心が高いか低いかだけでなく、そこに内在している安定性をも検討するべきではないか、という考えに基づいています。日々の自尊心を測定し、その変動を測定することによって、自尊心がどれほど環境に影響を受けやすいかを自尊心の不安定性(instability)と呼ぶ研究の流れがありますが、自尊心の力動性は、自己をテーマとした語りに含まれる評価の変動であり、不安定性である、という点が異なります。質問紙上の尺度を用いて測定する場合、自尊心とナルシズムは非常に相関が高く、区別することが困難です。本論文ではマウス・パラダイムと呼ばれる手法を用いてコンピューター上で実験参加者に自己について発言を行ってもらい、その評価の揺れをマウスで表現してもらうことによって力動性を測定しました。その結果、自尊心が高いだけでなく、その力動性も高い個人、すなわち、自分に対する高い価値が内在的に安定していない個人のナルシズム傾向が強いこと、そして自尊心は高いが力動性が低い場合にはナルシズム傾向は高くないことを示したのです。

本論文は、多くの方々の助力なしには執筆することができませんでした。まず、実験に参加者そして実験者として協力して下さった皆さんに感謝いたします。大学生のサンプルに頼ることへの批判は承知しておりますが、彼らなくして社会心理学の進歩は難しいと思います。次に、助手として勤務していた4年間の間、非常に知的に刺激的な環境を提供していただいた東京大学社会心理学研究室の教員・学生・スタッフのみなさんに心より御礼を申し上げます。最後に、実験手法でもあり、博士論文を通して指導して下さり、本研究の「売り」でもあるダイナミカルな手法を授けていただいたフロリダ・アトランティック大学のノバック教授に厚く御礼申し上げます。

## ◇ 遠藤 由美（関西大学）

この度は、拙稿に対して「優秀論文賞」を賜わり、誠にありがとうございました。審査員の先生方から多くの示唆に富むコメントをいただき、おかげさまで当初の拙稿がずいぶん改訂されました。また、選考委員の先生方にもお目通しをいただきました上、過分なる評価をいただきました。この場をお借りして、心から感謝申し上げます。

私は現在カナダの西海岸、バンクーバーにあるブリティッシュ・コロンビア大学で、在外研究期間を送らせていただいています。今回の「受賞」とはいささかの関わりもありますが、この機をお借りして北米の研究生産について、少しお話をさせていただこうと思います。日本にいたときは授業や大学業務などで忙しく、新刊のジャーナルに目を通すことすらままなりません。ようやく雑誌を開くと、なじみある研究グループが新しい論文を発表しているのを発見して、愕然とすることがしばしばでした。読むスピードよりも生産のスピードの方が速いとは、一体どういうことだろう、これがかねてからの疑問でした。

こちらに来て見て聞いて改めてわかったのは、とにかく研究に使える諸資源量がまったく日本と違うということです。大学勤務の研究者が担当する授業は年間2コマ程度、大学業務は比較にならないほど少ない上（例：大学院生の採用は、場合によっては書類選考だけ、入試も面接も判定会議もなし）、テストの採点だけでなく時には授業そのものもTAがおこない、実験・調査は院生がボランティアの学部生の協力を得て遂行しますが、大学院願書には研究補助の経験を書くことになっているため、進学希望の学部生は実に熱心に研究の全過程を率先して担います。かのBaumeister先生の研究室では、こうして年間約80～90の実験を実施し、ヒット率は約3割とか。単純計算すると25以上の論文ネタが年々生産されることになります。教員も学生も夏休みは（真夏の日中気温が20度前後のバンクーバーでも）5月から8月末まで4ヶ月近く、クリスマス休暇

も約1ヶ月で、ほとんど誰も大学に姿を現わしませんでした。オフ期間中でも博士論文などは提出されますが、先生はひとたびバーケーションに出かけてしまえば、1ヶ月や2ヶ月音信不通状態となるも、教員間や院生から強い批判はでないとのこと。というのも、基本的に教員は夏休みの間は給与の対象期間ではないので、大学業務から完全に開放されているからです。おまけに7年ごとに1年間のサバティカル。カリブ海でダイビングしたり、ロッキー山荘でのんびりしながら研究構想を練る、これがクールな研究生活だと考えられています。

気になる院生の就職状況は？ 英語は世界言語ですから、世界中がレイバー・マーケットとなります。中東・アジア諸国などでは、大学教育は英語でなされることが多いため、英語圏の博士号取得者は売り手市場で、就職難からくる過度のストレスにさらされることはあまりなく、地球上のあちこちに職を得て巣立っていきます。

日本ではおおそほとんどの大学で年々忙しさが加速し、筋力体力勝負の生活に明け暮れるというのが常態化しつつあるように思われます。論文を読むより生産スピードの方が速いのはなぜかおおそわかりましたが、両者をせめて同じスピードするにはどうすればよいか、解は今のところ見つかっておりません。

---



---

### ★★ 第3回『優秀学会発表賞』決定 ★★

---



---

#### 選考経過と結果の報告

選考委員長 村本 由紀子（横浜国立大学）

去る6月14・15日に広島大学で開催された日本グループ・ダイナミックス学会第55回大会において、「優秀学会発表賞」の選考が行われました。同賞は、大学院在学中もしくは修了（退学）後5年以内の会員の研究奨励を目的として設けられた学会賞です。以下、今回の選考経過ならびに結果の概略をご報告いたします。

1. エントリーの受付…大会発表申し込みと同時に行われました。エントリー総数は42本（ショート・スピーチ部門14本、ロング・スピーチ部門4本、ポスター部門20本、English Session 4本）でした。
2. 事前審査…5月中旬から下旬にかけて、論文集原稿を対象とした事前審査が行われました。個々の選考委員（理事+理事会の委嘱を受けた1名）が部門ごとに優れていると思われる3本を選び、それぞれに1点を与えました。集計の結果、各部門上位3位までの発表15本（ショート・スピーチ部門5本、ロング・スピーチ部門3本、ポスター部門4本、English Session 3本）が、当日審査へと進むことになりました。
3. 当日審査…事前審査でノミネートされた15発表について、大会期間中に当日審査が行われました。1つのノミネート発表につき3人の選考委員が審査を担当し、研究内容・プレゼンテーションのそれぞれについて、5段階で評価を行いました。
4. 最終集計…事前審査・当日審査の得点を併せた最終集計の結果、部門ごとに最高点を獲得した以下の4発表が、選考委員会での審議を経て、第55回大会の優秀学会発表賞に輝きました（敬称略）。

#### <ショート・スピーチ部門>

◆三船 恒裕 「内集団バイアスの性差：最小条件集団を用いた実験研究」（共著者：山岸 俊男）

#### <ロング・スピーチ部門>

◆木村 昌紀 「関係継続の予期が対人コミュニケーションに及ぼす影響」（共著者：磯 友輝子・大坊 郁夫）

<English Session>

◆前村 奈央佳 "The influence of empathic ability on intercultural attitude in the workplace: How do Japanese employees feel about Indonesian trainees?" (共著者: Junzo Kato, Takehiro Fujihara)

<ポスター発表部門>

◆林 幸史 「写真投影法による危険認知の把握(1)～大人の目に映る、子どもの危険～」 (共著者: 岡本卓也・藤原 武弘)

なお、受賞者は、受賞した内容に関する論文を第1著者として『実験社会心理学研究』に優先的に投稿する権利を有します。すなわち、「特別論文」に準じて主査および副査1名で審査を受けることができます。ただし、投稿の権利は、メールマガジンJGDA Flash上での受賞発表日(2008年6月25日)から1年間に限って有効です。優先投稿を希望する受賞者は、2009年6月25日までに編集事務局へ原稿をお送りください。

\*\*\*\*\*

☆☆ 受賞者の声 ☆☆

◇ ショート・スピーチ部門:

三船 恒裕(北海道大学大学院文学研究科、日本学術振興会)

この度は優秀学会発表賞という名誉ある賞をいただいたことを光栄に思います。本発表を評価していただいた諸先生方に心より御礼申し上げます。

本発表では、最小条件集団における内集団バイアス現象に関する性差を報告しました。近年の研究によって内集団バイアスは、内集団成員同士の相互協力を目指すデフォルトの意思決定ルールによって生じることが明らかとなってきています。神・山岸(1997)では、相手が内集団成員であってもその相手が自分のことを同じ集団の成員だと思っていなければ内集団への協力率が高まらず、また、その協力率は外集団条件や統制条件の協力率と変わらない、という知見が示されました。一方で、近年、内集団ひいきの性差が注目されてきました。男性は集団間葛藤状況において、内集団の男性と協力し、且つ、外集団の男性を攻撃する傾向を進化の過程で獲得してきた、というものです。つまり、この主張に基づくと、男性は神・山岸(1997)の実験パラダイムにおいて、相手が自分の所属集団を知らない条件でも統制条件と比べて内集団への協力を高め、且つ、外集団への協力を低めると予測されます。そこで本研究では男性のみあるいは女性のみが実験に参加している状況を用いて神・山岸(1997)の実験を追試しました。結果、女性では彼らの知見を再現しつつ、男性では相手が自分の所属集団を知らない条件でも内集団への協力率が高まるという知見が示されました。しかし、男性同士でもやはり外集団成員相手の条件と統制条件の間の協力率の差は見られず、男性は外集団に対して攻撃的であるという主張は否定されました。これらの結果に基づき、本発表では、男性における内集団への一方的な協力という現象が理論的な問題点として残ることを踏まえつつ、内集団への協力と外集団への攻撃は異なる心理メカニズムに基づいている可能性を指摘し、内集団バイアス現象を理解するためにはそれらがどのように相互作用しているのかを考えることが重要であると主張しました。

最後に、本発表に対して有意義なコメントや質問をしていただいた先生方に感謝申し上げます。先生方から指摘された本研究の理論的な問題点、あるいは過去の知見との整合性の問題などは今後の研究方針を決める上での大きな糧となりました。この受賞を励みとして今後も研究活動に邁進していく所存です。

\*\*\*\*\*



## ◇ ロング・スピーチ部門

木村 昌紀（大阪大学大学院人間科学研究科）

この度は、われわれの研究発表を評価していただき、大変嬉しく思います。本発表は、未知関係と友人関係を対象にした一連の会話実験から、これからも関係が続いていくという「関係継続の予期」が対人コミュニケーションに及ぼす影響について検討したものです。

すべての実験を通じて一貫した結果が得られました。これからも関係が続いていくという予期がある場合、相手の重要性が高まり、誰しもコミュニケーション動機が促進されます。対照的に、その場限りの一時的な関係であると思う場合は、対人的志向性の個人差があらわれます。具体的には、社会的スキルの高い者ほど、他者とかかわる心理的コストが少ないため、コミュニケーションに積極的に取り組み、それをポジティブに認知していました。

外発・内発という違いから、予期が異なる影響をもつことも示されました。外発的予期を実験的に操作した研究から、関係を続けていかねばならない場合、どのような相手かを見極めるために情報収集が行われていました。また、内発的予期に注目した研究から、関係を続けていきたいと思う場合は、相手に関与することを決めているため、活発な情報発信が行われていました。

これまでの研究では、対人関係の進展段階によって対人コミュニケーションの様相が異なることが報告されています。しかしながら、同じ関係の進展段階でも未来に対する展望によってコミュニケーション自体が影響を受けることは理論的に重要であると思われます。加えて、国際化の進展や雇用形態の変化、インターネットの浸透により、ゆっくりと時間をかけた人とのかかわりから、短い時間の中でののかかわり・一度きりのかかわりへと移行しつつある現代社会において、本知見は実践的意義があるものと考えております。

研究計画の段階から発表に至るまでの間に、共同研究者はもちろん、研究室内外のたくさんの方から貴重な意見をいただきました。今回あらためて、研究が1人で完結するのではなく、コミュニケーションによって展開されることを実感できたように思います。最後になりますが、たくさんの方のかかわりの場を提供してくれた本学会に感謝します。今後とも、よろしくお願いします。

\*\*\*\*\*

## ◇ English Session

前村 奈央佳（関西学院大学大学院社会学研究科）

この度は、このような賞を頂戴して大変嬉しく思います。English Sessionでの発表は今回が初めての挑戦でした。特に留学経験もなく、英語が得意というわけでもなかったのが不安はありましたが、自分の研究について英語で語る機会を身近に得られるということ、今回のテーマを将来的に日本人以外の方にも広く伝えたいという気持ちから発表を希望しました。今回の研究発表は、日本の企業における日本人従業員の共感力がインドネシア人研修生の受容態度に及ぼす影響について検討するものでした。データは、ある企業のご協力のもと、フィールド調査によって採取しました。結果として、日本人の共感力とインドネシア人研修生に対する態度に関連性がみられ、特に共感力の認知的側面は態度の評価的側面に、情動的側面は態度の行動的側面に影響を与えることが明らかになりました。発表の際には、座長の先生を初め、たくさんの先生方からご質問やコメントを頂戴いたしました。研究に関するご指摘以外にも、今後の現場で研修生の受け入れを検討されている方からも実践的なご質問やコメントを頂き、日本が直面している外国人労働者の受け入れに関する問題に取り組む意義を改めて感じました。この場をお借りして御礼申し上げます。

なお、今回発表するにあたり、研究室の先生やゼミ仲間には時間を割いて頂いて私の練習におつきあい頂き、研究内容に関するアドバイスもたくさん頂きました。また、私の所属する大学には、海外の研究者の方が大学院生に英語での発表や論文作成の指導する制度があり、週に1度のペースで研究テーマについて英語で考える機会にも恵まれていました。このような、身近な方々からの支えなしには今回の受賞はなかったと思います。日本国内の学会で英語を用いてディスカッションすることには多少の違和感もありますし、ネイティブに対して話す以上の恥ずかしさやもどかしさを感じることもあります。ですが、研究を国際的な視点から行っていく上での身近なチャンスであり、特に若手の研究者にとって良いトレーニングになると思いますので、ぜひ継続して頂きたいと思います。

最後になりましたが、この度の受賞にあたり、ご選考頂いた審査員の先生方、研究に対するコメントやアドバイスをくださった方々、貴重なお時間を割いて調査にご協力頂いたM社の皆様方に感謝いたします。この受賞は、今後の研学生活への大きな励みになりました。

\*\*\*\*\*

◇ ポスター部門：

**林 幸史（関西学院大学大学院社会学研究科）**

このような賞をいただき、大変ありがたく思っています。私のような者が受賞できたことは、共著者でもあります藤原武弘先生、岡本卓也氏をはじめ周囲の人々のお力添えがあったからだと思っています。

発表させていただいた研究は、写真投影法を用いて、小学校の通学路における子どもと大人の危険認知の特徴を明らかにすることを試みたものです。写真投影法とは、調査対象者にカメラを渡して、何らかの教示のもとに写真を撮影してもらう調査手法です。私が所属する研究室では、数年前から写真投影法を用いて地域に対する愛着や社会的アイデンティティを測定する研究が行われています。それらの研究で培われた調査を実施する上でのノウハウを活用してもらい、本研究では子どもと大人それぞれの目に映る通学路の危険箇所を明らかにしました。具体的には、大人は道路や交差点といった交通に関する写真を多く撮影していたのに対して、子どもは路肩の溝、藪などの暗がりなどを多く撮影していました。今のところ、一般化できるだけの知見ではありませんが、今後も研究を継続していき、子どもと大人の両者が安全に、安心して生活できる環境づくりの一助になればと思います。

最後になりましたが、調査にご協力いただいた児童・保護者の皆様、また学会当日、私たちの発表の場にお越しいただき、貴重なご意見を下さった先生方、審査員の先生方に、この場をお借りして感謝申し上げます。

---

---

**★★ 常任理事会からのお知らせとお願い ★★**

---

---

**☆☆ 役員選挙について ☆☆**

担当 矢守克也

本年度は、次期（2009～2010年度）の役員選挙を実施する年にあたっております。以下の日程で実施する予定です。会員のみなさまには、選挙台帳の作成にご協力を賜われますとともに、積極的なご投票をお願い申し上げます。

- 9月中旬：選挙台帳（案）を送付
- 10月下旬：選挙台帳（案）異議申し立て締め切りと選挙台帳の確定
- 11月中旬：役員選挙（会長、理事、監事）の投票用紙、選挙人名簿などを送付
- 11月下旬：投票締め切り
- 12月上旬：役員選挙（会長、理事、監事）開票
- 1月上旬：理事の互選による常任理事選挙
- 2月上旬：選挙結果の確定と公表

**☆☆ アジア社会心理学会発表支援制度について ☆☆**

担当 唐澤かおり

すでに、総会でもお伝えしたとおり、日本グループ・ダイナミックス学会は、アジア社会心理学会との交流・連携を促進するために、日本国外で開催されるアジア社会心理学会で発表される、本学会所属の若手研究者による優れた研究に対して渡航経費の一部を補助することになりました。平成21年度にイ

ンドで開催される大会より、支援を開始いたします。応募要項については、インド大会の日程について詳細が決まり次第、HPにアップする予定です。グルダイフラッシュでもアナウンスいたしますので、応募資格を持つ方は、積極的にご応募ください。

---



---

**★★ 事務局からのお知らせとお願い ★★**

---



---

◆第55回大会委員会事務局から発表者の変更について

第55回大会の次の発表において発表者の変更がありました。

2日目 6月15日 13:00～15:00 ポスター 2

P2-24 「新潟中越地震の事例的研究 ―被災後の避難行動を中心として―」

変更前

尚絅学院大学総合人間科学部  
 プール学院大学国際文化学部  
 日本大学文理学部

○水田 恵三  
 西道 実  
 堀 洋元

変更後

尚絅学院大学総合人間科学部  
 プール学院大学国際文化学部  
 日本大学文理学部

水田 恵三  
 ○西道 実  
 堀 洋元

◆実験社会心理学研究の特集テーマ募集

「実験社会心理学研究」には、グループ・ダイナミックスや社会心理学に関連する特集を掲載します。特集は、読みごたえのある論文3編程度で構成します。特集についての企画をお持ちの会員は、企画の趣旨、特集論文の概要等をまとめた企画書（A4版1～2枚程度）を、編集委員長に提出して下さい。企画の採択については、常任編集委員会で審議、決定します。特集論文の審査手順など詳細については、学会ホームページに掲載してあります。URLは、[http://www.groupdynamics.gr.jp/journal/event\\_info.html](http://www.groupdynamics.gr.jp/journal/event_info.html)です。ご参照ください。

なお、「実験社会心理学研究」は、特集の掲載によって、一般投稿論文の掲載に大幅な遅滞が生じないことを重視しています。企画を提出される方は、この点をお含みおき下さい。

◆実験社会心理学研究の書評候補募集

事務局では、実験社会心理学研究の書評の候補となる著作を随時募集致しております。よい本がありましたら事務局までご推薦ください。

---



---

**☆☆ 広報担当からのお知らせ ☆☆**

---



---

◆JGDA\_Flash：グルダイでは【日本グループ・ダイナミックス学会 広報（速報）メールマガジン】（JGDA\_Flash）を運用しています。これは、速報性が要求される情報・ニュースを会員のみなさまにe-mailでお知らせしようとするものです。現在登録されている会員は約600名です。グルダイ会員のみなさまの中には、会員名簿にメールアドレスを掲載されていない方や最近アドレスを取得された方、またアドレスを変更された方なども少なくないのではないかと思います。登録、メールアドレスの変更、配信停止の連絡、マガジンに関するご希望・お問い合わせ等は、以下のアドレスのグルダイ広報メールマガジン運営担当マスターをお願いいたします。

[office@groupdynamics.gr.jp](mailto:office@groupdynamics.gr.jp)

◆会員の皆様がお書きになった新著を、400字程度でご推薦いただき、上記までメールにて随時ご送付

<http://www.groupdynamics.gr.jp/>



いただきたいと思います。なお、ご推薦の文書はなるべく著者でない方に書いていただき、ご著書に関する出版社等の情報とともに、その推薦の方のお名前とご所属などもお書きくださいますようお願いいたします。これまでに掲載された記事は以下のWEBで閲覧できます。

<http://www.groupdynamics.gr.jp/bookreview/index.html>

◆研究会案内等についてのニュース記事の掲載希望も大歓迎で受けつけています。上記のアドレスまでお送りください。なお、これまでに配信されたFlashは、以下のWEBで閲覧可能です。

<http://www.groupdynamics.gr.jp/cgi-bin/magbbs2.cgi>

### ☆☆ グルダイ学会関係連絡先 ☆☆

本学会では、事務支局を中西印刷株式会社に開設しております。入退会、住所・所属等変更、会費納入、機関誌・ニュースレターの未着・メールマガジンなどのメール配信先の登録・変更・停止等の連絡先は、事務支局である中西印刷株式会社までご連絡ください。各種お問い合わせの具体的な連絡先は以下の通りです。

◆【事務支局】住所・所属変更、その他お問い合わせは、  
 中西印刷株式会社 学会部 （日本グループ・ダイナミックス学会担当：岡田）  
 〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入ル  
 TEL: 075-415-3661 FAX: 075-415-3662 e-mail: [jgda@nacos.com](mailto:jgda@nacos.com)

◆投稿論文の送付、機関誌編集に関する問い合わせ、その他学会運営に関するご意見は、  
 「実験社会心理学研究」編集事務局  
 広島大学大学院総合科学研究科行動科学講座 浦研究室内  
 〒739-8521 東広島市鏡山1-7-1  
 Tel/Fax: 082-424-6576 e-mail: [jjesped@hiroshima-u.ac.jp](mailto:jjesped@hiroshima-u.ac.jp)

◆ぐるだニュースの編集・記事の投稿、メールマガジンへのニュース記事投稿、新刊案内や研究会案内等のニュース記事、公募情報などは、  
 静岡県立大学看護学部 西田公昭研究室  
 〒422-8526 静岡市駿河区谷田52-1 TEL: 054-264-5486 Fax: 054-264-5099 (大学事務局)  
 E-mail: [office@groupdynamics.gr.jp](mailto:office@groupdynamics.gr.jp) までお送りください。  
 また、マガジンに関するご希望・お問い合わせ等も、同アドレスまでお送りください。

◆学会事務局  
 愛知淑徳大学コミュニケーション学部コミュニケーション心理学科 斎藤研究室  
 TEL: 0561-62-4111 (代表) / FAX: 0561-63-7734 (学科準備室)  
 E-mail: [sec-general@groupdynamics.gr.jp](mailto:sec-general@groupdynamics.gr.jp)

◎（編集後記）北京オリンピックを見ながら、スポーツチームやイベント運営におけるグルダイの面白さを無責任に評価しつつ、日本の応援しながらの「納涼会」が個人的な日課のようになっていました。まだまだ暑い日が続きますが、どなたさまにもご自愛くださいますように（編集子）